

## 優秀賞

### 祖父の死と二度の転校

岩出中学校 二年 前田 夢哉

小学校六年生の卒業式、友達が僕の周りを囲んで、「写真をとろう。」と集まってきた。僕は必死に涙をこらえた。なぜなら僕はみんなと同じ中学校にはいけないからだ。

父の仕事の転勤で、知り合いが一人もない県外の中学に行くことが決まっていた。

「また中学で会おうな。」そんな声が所々で聞こえてきて、すごくうらやましかった。次の中学校は三つの小学校が集まる、十一クラスもある大きな学校でクラスも一人でいる子がたくさんいるにちがいない。なんて話しかけて友達になろうか、不安半分期待半分で入学式をむかえた。当然だけど、知っている顔は一人もなくて、心の中にあっただ期待半分で全部不安へと変わった。みんな嬉しそうにクラス発表の紙の前で喜んだり、残念そうにしている姿が見えた。僕には、一緒に喜んだり悲しんだりする友達はここにはいない。とたんに、中学校の制服を着たみんなが大きく強く見え、自分がとてもちっぽけに見えた。次の日は本当に学校へ行くのが嫌だった。教室に入るとみんな小学校の時の仲間かたまっている。誰ひとり、僕に話しかけてくれる人はなくて、僕は前の学校の友達を思い出しては涙をこらえていた。休み時間は文庫本を読んで過ごした。放課後は大急ぎで家に帰った。何日もそんな日が続いた。『僕は、このままではいけない、ここで頑張らなきゃいけない。』そう思い、少しずつ誰かに話しかけようと努力した。それから何かが変わってきた。会話がだんだん弾み、話が合う仲間が増えて、二学期になるころにはすっかり楽しくなり、前の学校のことを思い出すことはほとんどなくなった。そんなとき、父から重大な発表があった。「仕事の都合で父と母の地元、和歌山に引っこしたいのだけれど、ついてきてくれるか・・・。」ということだった。僕と弟は猛反対した。

『せっかくできた仲間と二度も離れるのはいやだ。転校はとてもつらかったけれど、もし転校していなければ、今いる仲間には出会えていなかった。』やっとな最近そう思える

ようになったばかりだったのに。『絶対に今度こそついていけない。』そう心に決めていたときだった。小さい頃から僕をとともかわいがってくれていた祖父が突然亡くなったと知らせが来た。僕は信じられなかった。祖父の家に行くと、いつもいるはずの部屋にはおらず、奥の部屋に眠ったように横たわっていた。祖母が「夢哉が来てくれたよ。」と声をかけたが、祖父は黙ったままだった。身近な人の死を経験したのは初めてだったので僕はなんとも言えない、やるせない気持ちになった。大切な人を突然なくした祖母や母は、僕がどんなに気遣っても、ずっと泣いていた。僕は一つの決断をしないといけないと考えていた。葬式の日、僕は弟を誘って父と母に伝えた。「和歌山に住んでもいいよ、おばあちゃんの側にいてあげるよ。」と。母は泣きながら、「ありがとう。」といった。

四月、僕は二度目の転校をした。でも今、僕はとても後悔している。なぜならまだ親しい友達がいない、一年前と同じ状況が続いているからだ。いつかまた『ここにきていなければ今の友達には出会えていなかった。』と思える日がくるのか・・・。

僕は祖父の写真の前で「見守っていてね、頑張るよ。」と伝えた。亡くなった祖父との約束を果たすためと、もう一度元気に笑う祖母と母の顔をみるために、毎日を一生懸命過ごそうと誓った。